



「目は脳の鏡」

—瞳孔測定の意義と実際—



演者

日本医科大学付属病院 高度救命救急センター
急性・重症患者看護専門看護師

嶋田 一光 先生

瞳孔の測定、異常所見の存在は、神経集中治療において予後予測因子となる重要な臨床所見の一つであるといわれています。特に二次的脳損傷へ進行しないように早期発見することが重要であり、直接見ることのできない頭蓋内環境変化をすばやく察知するためにも瞳孔の測定、異常の存在は重要な観察ポイントとなります。

近年、瞳孔の測定の方法や客観的評価を行う重要性について多くの文献がみられるようになりました。また、AACN(米国クリティカルケア看護学会)においては、従来のペンライトで瞳孔の測定をするのではなく、瞳孔記録計の使用の有効性について述べられています。ペンライトでの瞳孔の測定においては、検者側の要因が多くあり、そのため曖昧さがあることを私たち看護師は認識しなくてはなりません。

儒学者孟子には、「目は心の鏡」という言葉があります。目は、その人の心を映し出す鏡のようなものであり、目を見ればその人の心のさまが読み取れると言われていています。私たち救急領域に携わる看護師においては、「目をみること」いわゆる瞳孔の測定は、脳の状態を知ることにつながることから、「目は脳の鏡」と例えることができるのではないのでしょうか。また、脳の鏡となる目を見るためには、やはり正確な知識や技術が必要となることはいうまでもありません。このセミナーを通して今一度「目をみること」瞳孔についての知識や当施設での瞳孔計の活用の実際などを提示したいと考えています。